

## II-18. 下垂体柄腫大を伴った中枢性尿崩症の1例

塚原佳代, 大村昌夫, 三木隆司  
西川哲男 (横浜労災)

中枢性尿崩症で, MRI 上・下垂体柄の腫大病変を呈した一例について報告した。

腫大性病変の原因として, 腫瘍, 肉芽腫性疾患, 炎症等が考えられたが, 本症例では特に明らかな原因はみつけられなかった。

このような症例では痴呆や, 視野狭窄等を示すこともあり, 今後は, さらに開頭生検等を行うことも必要であると考えられた。

## II-19. 食道静脈瘤破裂で来院した Felty 症候群の1例

石井 敦, 毛里あかね, 吉村直樹  
松島保久 (松戸市立)  
平井康夫 (同・消化器)  
渋谷正徳 (同・救急部)  
浅沼勝美 (同・病理)

症例は, 50歳女性。平成6年9月, 吐血のため救急受診。上部消化管内視鏡にて, 食道静脈瘤より出血を認め硬化療法により小康をえた。手指関節の高度変形, リウマチ因子高値 RA, さらに白血球減少・脾腫を認め, 高度の門脈圧亢進症を伴った Felty 症候群と診断した。本症例では, 食道静脈瘤の再破裂の可能性が高く, 摘脾術・食道離断術を要するが, 治療法も含め本症の病態を検討した。

## II-20. 慢性関節リウマチの経過中に発症した第Ⅷ因子阻害物質陽性非血友病の1例

生月元子, 石毛憲治, 吉田象二  
(旭中央)

症例; 56歳, 男性。主訴; 抜歯後出血。現病歴; 47歳, 慢性関節リウマチと診断された。平成6年6月, 腹部に皮下出血が出現。8月, 歯科にて抜歯後, 出血が持続し当院内科入院。PT 正常, APTT 延長, 第Ⅷ因子活性低下, 第Ⅷ因子阻害活性高値, RA (++) であり, 第Ⅷ因子阻害物質による出血傾向と診断し, PSL 40mg/day の投与を開始した。これにより第Ⅷ因子活性の上昇, 第Ⅷ因子阻害活性の低下が認められ, 現在も経過観察中である。

## II-21. 著明な多発骨折を呈した, 良性単クローン性γグロブリン血症が原因と思われるファンコニー症候群の1例

小野田昌弘, 時永耕太郎, 青墳信之  
斎藤康栄, 佐藤重明 (鹿島労災)

症例は83歳女性。昭和56年より腎性糖尿, 尿蛋白陽性および尿中 BJP 陽性を指摘されていた。昭和58年には下肢を中心として多発骨折を起こし, 低P血症, 腎性糖尿, 汎アミノ酸尿よりファンコニー症候群と診断された。また血清蛋白免疫電気泳動にて IgA κ 型M蛋白血症を認め骨髄所見などから良性単クローン性γグロブリン血症 (BMG) と診断された。BMG がファンコニー症候群の原因であると考えられた。

## II-22. 多関節痛を主訴とした粟粒結核の1例および当院における骨・関節結核の検討

廣瀬晃一, 吉田象二 (旭中央)

症例; 25歳, 女性, 主訴; 発熱, 右手指関節痛 現病歴; 平成6年4月頃より右第1指 PIP, 第2指 MP, PIP の腫脹, 疼痛および38℃ 台の発熱が出現, 腹部超音波検査にて腹水, 脾腫瘍を認めた。右手指関節切開排膿術および脾腫瘍穿刺を施行, これらより結核菌を検出し, 腹水中 ADA 値が高値である事より粟粒結核と診断した。

## II-23. 当院における肺塞栓症例の検討

熊野浩太郎, 山田克己, 泉崎雅彦  
尾世川正明, 松岡祐之  
(成田赤十字)

肺塞栓症は比較的稀な疾患であり, しばしば診断が困難であることが多い。また急激に発症し診断の遅れから予後不良となることも多く, 診断にはまず本症を念頭におくということが大切である。今回当院で肺塞栓 (肺梗塞) と診断された症例をまとめ診断に至るまでの経過, また発症の誘因について検討した。特に今回, 空港が近いという当院に特徴的な症例がみられたためそれについても報告した。